

# JSIR NEWS LETTER

国際リハビリテーション研究会

Vol.18 2023年1月28日発行

## 巻頭言

### 『研究会の取り組みと魅力』

大西 海斗(国際リハビリテーション研究会事務局、  
株式会社コーエイリサーチ&コンサルティング)

#### 【巻頭言】

『研究会の取り組みと魅力』

大西 海斗

#### 【特集】

JSIR第6回学術大会

石本 馨  
高橋 潤平  
有田 久仁子  
岡本 莉奈  
野原 鈴香  
竹田 あんみ

#### 【コラム】

『世界のめがね』

山本啓太

#### 【お知らせ】

皆さま方には健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。  
国際リハビリテーション研究会は、過去3年余りコロナ対策のために対面の機会を制限し、心晴れぬ日々をお過ごしであった方も多いのではと拝察しております。

昨年11月には名古屋で学術大会を対面開催でき、多くの「久しぶり」の声とともに、このコロナ禍においてもSNSやオンラインセミナー、ニュースレターなどを通して、どこかで強くつながっていたことを実感できました。

本研究会は、リハビリテーション分野を中心に据えながらも、幅広く様々な経験や知見を持ったメンバーが集い、特に、事務局においては、各種イベントの準備や学術誌の発刊、広報などの活動に新たなアイデアを組み込み、常に変化しながら運営がなされています。

私自身、2018年にウズベキスタン※から帰国後、本研究会に入会し、学術大会の準備やニュースレターの作成などに関わらせていただき、その中で、会員の皆さまはじめ、国際リハや国際協力、開発分野に携わる方々から多くの最新情報をいただいています。また時には、その情報をもとに議論を深め、そして新たな情報として発信していく、そんな魅力的な研究会の一メンバーとして携われることを嬉しく思います。

ウクライナ情勢やCOVID-19など、安定しない状況が続く中で、多くの犠牲となった方を単なる統計上の数値にはしてはいけない、そう強く心に留めるとともに、国際リハ研究会をはじめ、協力や支援に携わる皆さまのより一層充実した活動が叶う年になることを願っております。

※JICA海外協力隊（理学療法士）派遣

## 【特集】 国際リハビリテーション研究会第6回学術大会

国際リハビリテーションの新たな可能性 ～内なる国際化への貢献を目指して～

国際リハの知見を国内でも！開催報告

国際リハビリテーション研究会 第6回学術大会長  
石本 馨（一般社団法人Bridges in Public Health）



【石本大会長 クロージングシンポジウムにて】

第6回学術大会が11月13日（日）に名古屋市で開催されました。テーマは「国際リハビリテーションの新たな可能性 ～内なる国際化への貢献を目指して～」。当研究会が目指す「国際性という文脈を帯びた場におけるリハビリテーション」の中で、日本国内に住む外国にオリジンを持つ人たちのリハビリテーションや介護・福祉に焦点を当てた大会でした。

シンポジウムや特別セッションでは、同テーマに沿って外国にオリジンを持つ人々への支援に携わる現場の声や家族の思いなど、多文化共生に関連した研究や活動が紹介されました。

彼ら彼女らが直面する問題の複雑さと共に、徐々にではありますが支援の輪が広がっていることがわかりました。また、一般演題やランチタイムセッションでは、ミャンマーやウクライナの現状など時宜に即したもののや、大会テーマに関するもの等、国内外での研究成果や活動報告が発表されました。

2022年6月現在の在留外国人は約300万人で、年齢、国籍、在留資格は年々多様化しています。文化的背景や日本での生活背景やニーズが多様な人びとに、私たちが支援者として対応する機会は今後も増えることは明らかです。そのような状況下で、異文化に身を置いた経験を持つ会員の多い当研究会の存在は、外国にオリジンを持つ人と国内の医療・福祉現場をつなぐ架け橋として今後重要性を増すと思われます。その一環として、当研究会が開発中の国際事例フレームワーク（ICFプラス異文化接触ドメイン）を、異文化状況下にある人びとの健康問題のあり方や解決の手がかりを探るための新たな枠組みとして紹介することも必要だと感じました。

3年ぶりの対面開催（一部の講師がオンラインで発表されたこともあり、実質的にはハイブリッド方式でした）で、運営上の課題は見られたものの、会場のあちこちで懐かしい人との再会や新たな出会いが広がるなど、参加者の方々には対面ならではの醍醐味を堪能いただけました。ありがとうございました。



【学会シンポジウム会場の様子】

## 第6回学術大会に参加してみて

高橋 潤平（JA愛知厚生連 安城更生病院）



【オープニングシンポジウム 高橋氏】

この度は国際リハビリテーション研究会第6回学術大会にて“海外ルーツの患者が抱える課題について～急性期病院で働くソーシャルワーカーの視点から～”というテーマで発表をさせて頂きました。このような機会を頂いたことを国際リハビリテーション研究会の皆様、その他関係者の方に感謝申し上げます。私自身ソーシャルワーカー歴は8年目になります。

海外ルーツ患者の支援に対しては、言語が通じない、支援者が不足している、文化が違うことから実態が掴みにくく、苦手意識を持っているのが本音になります。その中で今大会に参加し、講師の方々様の様々なアイデアや取り組みを知ることができ、とても深い学びと勇気づけられるものがありました。

ソーシャルワーカーとして日頃の業務で感じる課題は多岐にわたります。中でも海外ルーツ患者への支援に対しては、言語が通じないことなど、海外ルーツ患者特有の共通課題から孤立化しやすい傾向があると感じています。孤立化を予防するには、たとえ些細でも地域住民・関係機関・コミュニティなどとの繋がりを持つこと。すなわち、ソーシャルインクルージョンを育むことが大切だと考えています。そのためには、院内外が多職種・関係機関との連携を強化することや、ネットワーク構築も必要だと考えています。ソーシャルワーカーが介入することで、院内外の橋渡し役となり、資源や仕組み、制度などが対応していない時こそ、個別ケースを通して課題を抽出し、感じる課題を地域へ発信することで個別課題から地域課題へ繋げていければと思っています。

# 「日本における中国人・ベトナム人技能実習生の作業有能性と精神的幸福度との関連」の演題発表を行って

有田 久仁子（東京大学大学院 医学系研究科）

今回の第6回国際リハビリテーション研究会学術集会において、一般演題枠で発表する機会を頂き感謝申し上げます。本研究は、作業療法と公衆衛生の視点から、日本で働く技能実習生のメンタルヘルスについて調査したものです。

私はこれまで病院の作業療法士として外国人の方の作業療法を担当する経験を通して、在日外国人の方が言葉の壁、医療の壁、そして日常生活においても多くの課題を持つ様子を目の当たりにし、日常生活の質向上の支援の専門家である作業療法士にも何かできるのでは、と思っていました。そこでまず、その課題はどのようなものなのかを調査してみたいと思ったのが本研究の動機でした。

## 【一般演題セッション 有田氏】

今や日本における外国人労働者は170万人を超えています。今回の調査はその約20%を占める技能実習生に焦点を当てました。調査票は中国語とベトナム語で作成し、日本においてどのような日常生活を重要と考えているのか、日常生活の有能性（うまくやれているという自己評価）と幸福度について調べました。約500名の方に調査の協力をいただき、383名分のデータを解析しました。この調査で分かったことは、①技能実習生の約50%が「身体に気をつける」「目標達成のための努力」「金銭管理」が重要と考え、②約30%が「自己表現」と「目標達成」が難しいと感じ、③作業有能性（日常生活をうまくやれていると感じること）が幸福度と正の相関関係がある、ということでした。一番のポイントは、日常生活をうまくやっている人は幸福度が高いということです。まさに作業療法士の出番だ！と思いました。作業療法士をはじめ、リハビリテーション分野が率先して、在日外国人の方の健康に貢献できる可能性は大きいということです。

内なる国際化を続ける日本において、リハビリテーション分野が「みんなの健康」に対して何ができるのか、今後会員のみなさんと繋がりに一緒に研究し、社会に向けて発信・活動していきたいと思っております。

## 国内の海外ルーツの方への支援から学んだこと

岡本 莉奈、野原 鈴香、竹田 あんみ（国際医療福祉大学 成田保健医療学部）

はじめに、この度は石本大会長をはじめ、国際リハビリテーション研究会の皆様、そしてこの発表のためにインタビュー等にご協力いただいた方々に深く感謝申し上げます。

私たちは、「難民の子どもたちに対する学習支援」と「海外ルーツのある重度障害者の介助」の経験から学んだことを発表しました。1つ目の「難民の子どもたちに対する学習支援」は、第三国定住難民として暮らしているミャンマーをルーツに持つ小学生を対象に行った学習支援の経験です。

私たちは、子ども達に会う前はテレビなどで報道されている難民の子ども様子を想像しており、悲観的なイメージを抱いていました。しかし、実際に関わってみると、気さくで明るい子どもたちで、教室のアウトホームな雰囲気が印象に残りました。そして、子ども達にとってこの教室は、学習だけでなく、学校や家庭での出来事を楽しく話せるような居場所であることに気付かされ、また発達障害のある子の対応に課題があることも知りました。2つ目の「海外ルーツのある重度障害者の介助」は、ペルー共和国にルーツがある筋萎縮性側索硬化症の方の介助を行った経験です。まず、文化においては、友人や親戚等が集まる機会が多く、日常に歌とダンスが溢れ、時間におおらかなことなどを実感し、介助に関わるなかで他文化を受容し適応していくことの重要性和その面白さを学びました。また、コミュニケーションにおいては、挨拶の仕方や言語の違い、疾患特性による意思疎通の難しさはあるものの、コミュニケーション方法を工夫し、本人や家族、学生ヘルパーが互いに協力すれば言語の壁を乗り越えられることを経験できました。

最後になりますが、世界各地で活躍している方々の発表を拝聴できたこと、またこのような貴重な経験ができたことを感謝するとともに、内なる国際化に貢献できるような療法士になれるよう、これからもより一層精進していきたいです。



【ランチタイムセッション 発表の様子】

## 【コラム】 『世界のめがね』

山本 啓太（認定 NPO 法人 AAR Japan [難民を助ける会]）

世界中で活動を展開している  
会員のめがねを通した  
世界の姿を各号お届けします。

今回は、  
**カンボジア**からです。



【カンボジア プチュンバンの様子】

カンボジアには日本と同じく「プチュンバン」と呼ばれるお盆休みがあります。今回、初めて職場のスタッフ達とお寺（パゴダ）に行く機会があったので紹介します。

まず、集合前に各自で御供物を購入します。私は何を買って良いのかわからず、商店のおじさんに尋ねると、缶の炭酸飲料を勧められたので6本ほど購入しました。他のスタッフ達は水や牛乳、即席麺など。全員集まったら出発。プノンペン市内にパゴダはたくさんあるので、すぐに

着くだろうと思っていると、有名なパゴダに行こうと郊外まで1時間半もかかりました。パゴダに着くと白い服を着た大勢の参拝者達が御供物をお坊さんに捧げると、お祈りをしてもらえます。その後、お線香をあげてスタッフが自宅から持ってきたお米を器に一つ一つお供えして終了です。後から知ったことですが、お坊さん達はお盆中、これらの御供物だけを食べて過ごすそうです。ちなみに参拝者達も一緒に食べることができます。私は徳を積もうという意識が希薄なので、5ドル分しか購入しませんでした。スタッフによっては即席麺を箱で購入するなど、カンボジアの人たちの信心深さを知ることができました。

## 【お知らせ】

### 【国際リハビリテーション学第5巻 郵送予定】

2023年2月に会員の皆様全員に「国際リハビリテーション学第5巻」を冊子体で郵送いたします。未着の方は事務局までご連絡ください。

### 【登録情報に関するお願い】

会員登録情報に変更のある方は事務局までご連絡ください。事務局連絡先：[jsir.office@int-rehabil.jp](mailto:jsir.office@int-rehabil.jp)

### 【年会費お支払いのお願い】

2022年度の年会費のお支払いがお済みでない方は、下記の口座まで年会費のご入金をお願いいたします。

銀行名：ゆうちょ銀行 口座名義：国際リハビリテーション研究会 記号：10540 番号：83410731

他金融機関から振り込む場合 店名：0五八（ゼロゴハチ）店番：058 預金種目：普通預金 口座番号：8341073

※振込者名と会員名を同じにしてください。

## 編集後記

今回の学会を通し、文化や言語の異なる方々が日本の中で取り残されないため、年齢や立場に関わらず多くの人々がこのテーマに関心を向ける必要性を改めて認識できました。事例や知見をご共有いただきました皆様に感謝を申し上げます。（古川雅一）

記事を通し「内なる国際化」の具体的な活動・多方面な支援を知ることができ、楽しみながら編集しました。ご協力頂きました皆様、誠にありがとうございました。2023年も宜しくお願い致します。（三田村徳）

## 事務局 編集担当

大西 海斗（コーエイリサーチ&コンサルティング）

長田 真弥（姉ヶ崎ケアセンター）

高橋 恵里（東北福祉大学健康科学部）

高橋 佳太郎（横浜市立脳卒中・神経脊椎センター）

古川 雅一（仙台医健・スポーツ専門学校）

三田村 徳（東北医科薬科大学病院）

山口 佳小里（国立保健医療科学院）

【研究会HP】 <https://int-rehabil.jp/>

【研究会FaceBook】 <https://www.facebook.com/pages/category/Nonprofit-Organization/>

[fit-Organization/国際リハビリテーション研究会-1951070205159667/](https://www.facebook.com/pages/category/Nonprofit-Organization/)

【お問い合わせ】 国際リハビリテーション研究会事務局 [jsir.office@int-rehabil.jp](mailto:jsir.office@int-rehabil.jp)

【JSIR HP】

